



たぬきと山伏

(八分)

むかーしあったとき…

あるとき 怖い顔をした大男の山伏が ホラ貝を背中に背負って えらそうに歩いていた。

まだ時刻はお昼をちよつとすぎたぐらいで、太陽はカンカンと高いところで照っていた。すると 道の真ん中に枝ぶりのいい松の木があつて その根っこをみると大きなタヌキが気持ちよさそうに昼寝をしていた…それをみつけた山伏は、よせばいいのに これは脅かしてやろう と思つて、そろり…そろり…そろそろそろ…とタヌキに近づくと 耳のそばにホラ貝をもつていつて思い切り吹いた…

ポオオオオー



1



タヌキはビックリ仰天して、こーんなに「と頭の上まで手を伸ばす」飛びあがつて走り出したが、だいぶ行ってからちよつと立ち止まって山伏の方をみてくやしそうな顔をして それからふり返りふり返りしながら逃げて行つた…山伏はその後ろ姿がおかしくておかしくて、天まで届きそうな大声を出して笑つたんだとき…

劇団 オン・サンタ



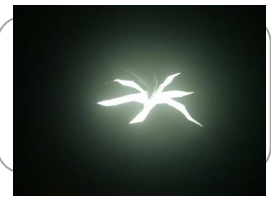
それから山伏は、次の村へ行くこうと思つて 一本歯の高下駄の音をガランガランと響かせながら歩いて行つた。ところが、その日に限つては恐ろしく時間の経つのが早くて、それに次の村までの道のりが恐ろしく遠くて、いくらも行かないうちに日がどんどんと暮れて、いつの間にかとつぷりと暮れてしまった。

しばらくすると、真つ暗な中を向こうの方から白い着物を着た人たちの長い行列が近づいてきた…それはよく見ると葬式の行列だった。

2



劇団 オン・サンタ



「ありやあ…葬式だ…困ったものが来たぞ…」一本道だから他の方へ逃げることはできない…山伏はどうしても次の村まで行かなきゃ…というわけでもないで、右をして今来た道を引き返し始めた…ところが葬式の行列は恐ろしく足が速くて、すぐ後ろに追いつきそうになった…山伏はこわいものだからだんだん大股に歩きだして、だんだん足を早く動かして…しまいはどうとう駆け出したが白い着物の行列はぴったりと後ろにくっついてくる…それでもう一生懸命息が切れそうに走っていくと道の真ん中に枝ぶりのいい松の木が立っていたので、やっとそこへかけつけて、大慌てで一の枝までよじ登った…

そうして白い着物の行列が通り過ぎたら降りようと思っただけで見降ろしていたら、たまげたことには白い着物の行列はその松の木の下にピタリととまった…そうして木の根っこにお棺をおろして坊さんたちがボジャ…ボジャ…ボジャボジャ…とお経

3

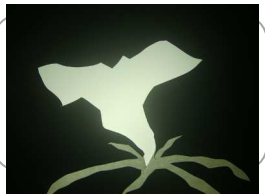
を読み始めた

「あらら…これは困ったことになった」と思っただけで山伏が木の上から眺めているとやがてお経がすんで、こんどは木の根っここのところをみんなでほりはじめた…そうしておいてその穴の中にお棺を埋めて、それからやがて、一人帰り、二人帰りしてそのうちにだーれもいなくなった

山伏は、さて自分もかえりたいものだと思っただけで、木の根っここのところにお棺が埋められていると思うとどうも怖くておりにいけな…そうかといって木の上で夜明けかするわけにもいかな…どうしようかと真っ暗やみの中で松の木の枝にまたがり、山伏は考え込んでいた…

そのうちあたりはますますシンシンと静かになってきた…「一呼吸」

山伏が何気なくヒョッと木の根っこの方を見降ろすとお棺を埋めたあたりの少



し土が盛り上がったところがひび割れてきて、そこがどんどん盛り上がってきた：\nそうしてそこから白い着物を着たものがフラリとはい出してきて山伏のいる松の木\nにとりつくつとソロリソロリと這い上ってくる：

劇団 オン・サンタ



「わあ あれはなんだ どうなるんだろうか：」山伏が思っていると 白い着物を\n着たものはだんだんソロリソロリと這い上ってきて 山伏がまたがつている 一の枝の\n下まできた：そして、山伏の方に青白い手がスーッと伸びてきて足にさわりそう\nになった：

「あら わあい：」

山伏はわめいて上の枝にのぼった：すると白い着物を着たものはまたソロリソロ\nリとその枝の下まで這い上ってきてスーツ手を差し出した

それで山伏はまた上の枝へ登って：そのまた上の枝へ登って、しまいにはとうとう



5

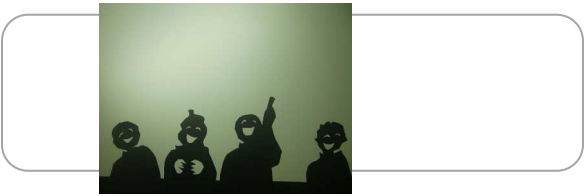


ソロリソロリと這い登ってきて手を差し出して山伏の足に触ろうとする それで山\n伏はもうどうにもこうにもしようがなくなつて、思わず背中に背負っていたホラ貝\nをひつつかんでいきの限りに

ボオオオオー **ボオオオオー**

と気が遠くなるほど吹いて吹いて いつまでも鳴らかしていた

劇団 オン・サンタ



そのうちにあんまり人の声がするものだから、山伏が気がついてみると まわり\nは明るくなつていて そのあたりで畑仕事をしていたお百姓たちがその松の木の根\n元に集まって、わいわい騒いでこっちを見上げていた

いつもは怖い顔をして威張っている山伏が 昼の真昼間に高い木のとっぺんにの\nぼつて 死に物狂いでホラ貝を吹いているのをみんな面白がって見物しているの

6

劇団 オン・サンタ

だつたとさ… いっちゃん ぼーん さけえたあ おしまい

おしまい

劇団 オン・サンタ

《参考資料》

雪の夜に語りつぐ」 笠原政雄 福音館書店
おらしべ長者」 木下順二 岩波書店